狐の恩返し（一）（城東町）

むかし、泉の八幡〈はちまん〉さんの境内〈けいだい〉に竜泉寺〈りゅうせんじ〉というお寺がありました。
寺の裏山には、古くから一匹の尾の先が白い狐が住んでいましたが、別に悪いこともしないので、村の人たちは、お参りするたびに、いつも油揚〈あぶらあ〉げや、あずきご飯を施〈ほどこ〉すことにしていました。

何年かたったある年に、そのお寺が焼けて、建て直しにどうしたものかと困っている時です。
ちょうどその頃、小枕〈こまくら〉村では、お寺を建て替〈か〉えて古いたくさんな材木〈ざいもく〉の置場に困っていました。
ある日、泉村の又左衛門〈またざえもん〉という人がたずねて来て、
「お寺が焼けて困っています。どうか、この古材木を売ってください。」
と、申し出ました。小枕村では処分〈しょぶん〉に困っている時でしたので、さっそく話がまとまり、又左衛門はその場で、銀二百匁を支払って急いで帰って来ました。
ところが、二十日たっても一と月たっても材木を取りに来ないので、さいそくの使いを泉村へやりました。泉村では驚きました。それもそのはずで、だれ一人材木を買いに行った者はないのです。
しかし、もう代金が払ってあるというので、相談の上、村人が総出で小枕村の古材木を運んで帰り不思議なことだと思いながらお寺を建てました。それが、昭和七年に改築するまでの建物です。そして誰いうともなく、あれは狐のご恩返しの仕業〈しわざ〉に違いないと、今も村人の間で信じられています。